

解答

□

問一 ① ア ② エ ③ イ

問二 イ

問三 1 テレビの報道を通じて人々の悲しみが伝わってくる

2 心にとっかりと記憶される

問四 ウ

問五 海が恩恵だけでなく、ときに災害をもたらすものであることを深く理解し、いかなる困難にあってもくじけることなく海と真剣に関わり続けようとする態度。

問六 千年ほど前に甚大な被害を同じ地域にもたらした津波の記録

問七 エ

問八 エ

問九 a 映〔る〕 b 沿岸

問十 いらっしゃる

問十一 d オ e ウ

問十二 1 のん 2 おに 3 さそっ

□

問一 a 札 b 重宝 c 新築 d 盛大 e 祝〔い〕 f 心得

問二 ウ

問三 イ

問四 登山に行くためのお金を貯める〔こと〕

問五 ア

問六 たのしさも苦しさもある登山は、人生と似ていて、人生の坂をのぼりはじめようとしている子どもたちのはげみとなるにちがいない〔と考えたから〕

問七 エ

問八 イ

問九 お金をためたそばから、家でお金が必要になってしまい、なかなか目標金額に届かないという状況。

問十 ウ

問十一 エ

問十二 ハツコマ山登山旅行の代金を当番が集める日

問十三 代金を立てかえて、登山へ連れて行きたい

問十四 1 公 2 私 3 名 4 実 5 玉 6 石

問十五 ウ

解説

□

問一 ①は「行方不明の家族を探して」も見つからず「道端にしゃがみこんで」いるので「絶望」、②は「もう会えないのではないかと思っていた人と再会でき」たので「喜び」、③は「避難所で支援を受け」たことで、相手の温かさ「感謝」していると考えられます。

問二 「つぶやく」は、「ぶつぶつとひとりごとを言う」という意味です。「ささやく」は「声をひそめて話す」という意味で、相手に話すという点が、「つぶやく」とは違います。

問三 1 「人々の両目からこぼれる涙がテレビを見ているこちらの両目から入りこみ」という比喻表現を事実直すと、「被害を受けた人々の悲しみが、テレビの視聴者にもよく伝わってきた」ということです。2 「見えない暗がりに溜まる」だけでなく「視聴者の」からだの内壁を伝い落ちては見えない暗がりに溜まる。溜まっていく「の」ように長く読んで考えるとわかりやすくなります。つまり、「すぐには忘れられないほど心に強く記憶された」ということの比喻表現です。

問四 まず、筆者が何に「はっとする」のかを考えます。漁師になるつもりの高校生が津波にすべてを流されても「この海が好きだ」という気もちに変わりはなく「という言葉に「はっとする」のです。嘘でも強がりでもないこの言葉に筆者は、海で生きていく者の純粋さ、ひたむきさ、まっすぐな思いを感じたのです。

問五 まず、「海と向き合う」とはそういうことなのだな」の「そういうこと」の指示内容をおさえます。それは「めちゃんくちやな被害を与えた海だけれど、だから嫌いになった、とはいわない。だからもう見たくもないとは、いわない」ということです。そして、傍線部の直後「海に限らずなにかと真剣に係わる」とは、そういうことなのだろう。災害と海そのものとは、別。くこれまで自分も、この海の恩恵をどれほど受けてきたことだろう」とあるので、この傍線部の前後の部分をもとめればいいのです。

問六 空欄文の主語を答える問題です。言い伝えと化し、眠る標本のようになってしまった過去の出来事とは何でしょう。この段落のはじめにある、「千年ほど前の津波の記録」のことです。

問七 「あなどる」とは、「相手の力を軽く見てばかにする」という意味です。

問八 文章全体から筆者の考えを読み取ります。選択肢の前半はみな同じなので、後半の「わたしたちはく」どうすべきかを考えます。第2段落の最後「破壊の後には、新たな誕生がきつと来る」の部分が根拠になっています。

問九 a「移る」「写る」などの同訓異字に注意しましょう。

問十 「来る」の尊敬語は「いらっしゃる」です。「いらっしゃる」は、他に「行く」「いる」の尊敬語でもあります。

問十一 dの「の」は「が」に言い換えられます。↓「オ」の「雪の降る日」。eは「の」のままで言い換えません。↓「ウ」の「姉の本」。

問十二 慣用句の問題です。1は「涙をのむ」、2は「おにの目にも涙」、3は「涙を誘う」です。

二

問二 「小言きり出ない」という意味がもしわからなくても、この言葉の前後を読んで考えてみましょう。「小言きり」の「きり」とは「それだけ」の意味です。

問三 まず文章の前半で家族の境遇を正確に読み取りましょう。親の仕事が不景気で、中学生のシンサクが働いてかしているのです。母から買い物頼まれ、自分がお金を出す時に、ちよつといい気持ちになっている場面です。「重宝がられて」ともあるように、両親に頼りにされて誇らしく感じているのです。

問四 シンサクの決心は、傍線部⑥の後を読んでいくと『よし、おら、自分で金ためる！ 五百円ためる！』くシンサクはくこう決心したのだ」とあります。もちろん、登山に行くためのお金です。

問五 傍線部の一文を読むと「先生も小学校のときのタケシ先生が、生徒といっしょに中学の先生になったのだから、みんなの意気は、天をつくようだった」とあります。みんなの気持ちを上を向くのですから、前向きな様子を表す「とてもはりきっていた」が正解です。

問六 先生の考えは「それで、先生、考えて、記念のために登山を計画したんだ」とあるので、「それで」の指示内容を考えればいいのです。直前の「人生には、たのしいことも、苦しいこともある。おめえたちも、これから、人生の坂をのぼりはじめるところだ」の部分を中心にまとめます。

問七 傍線部の直後を読むと「遠足と聞くと、いつもそうなるのだ。遠足といえば、いつも『いかせる、いかせない』で、家のなかгомめて、けつきよく、いままで一度も遠足というものにいったことがない」とあります。「胸のなかgom、スウと寒くなった」のですから、またいつものようになると不安になっているのです。

問八 この「られ」の意味は「受け身」。アは「自発」、イは「受け身」、ウは「尊敬」、エは「可能」です。

問九 問四で決心したようにシンサクは登山に行くためにお金を貯めています。ところが、家族がシンサクのお金を頼りにしているために、なかなかたまらないのです。それは傍線部直前の「く七十円とった。みやげにナットウを買って、三十円へった。次の日曜日くがんばって、百円。けれども、母ちゃんに七十円借りられた」とあることからわかります。

問十 「白まだらの大蛇がとぐろを巻いて、ねているようだ」という比喻表現を読み取る問題です。まず「白まだらの大蛇」とは、「ところどころに雪が残っているハツコマ山」のことです。「大蛇」ですから、こわい気持ちもあるのですが、傍線部直後に「あの背中、ドンドン！とふんづけてやるぞ！」とありますので、シンサクは登ろうと意欲的な気持ちでもいるということがわかります。

問十一 問九ではなかなかうまくたまっていなかったお金でしたが、旅行近くになると「うまくいきすぎちゃった」と言っています。シンサクは登山に行けることがうれしくてたまらないのです。

問十二 傍線部の前に「七月二十二日の朝、先生から登山旅行の注意があった。二十四日の朝、六時半、校庭集合、七時出発。金は二十三日、当番が集める……」とあります。「次の日」とは、この「七月二十二日」を基準に考えます。傍線部の後の「あしたはべんとうだけ持ってい」という先生の言葉からもわかります。

問十三 先生はシンサクが学校を休んだ事情や気持ちがわかっているようです。「あしたはべんとうだけ持ってい」という手紙には、「お金のことは何とかするから一緒に登山に行こう」という気持ちがかめられていると考えられます。問十五 「美しい」とありますが、ただ景色が美しいだけではありません。シンサクの気持ち、景色をより一層美しく見せているのです。一生懸命にお金を貯めて、行けると決まりかけた登山が前日にダメになり、一度はあきらめていたのに、先生のおかげで行けることになったのです。その喜びと先生への感謝で、胸がいっぱいだったのだでしょう。